

研究報告

子育て支援センターにおける 小児看護学演習の学び

The learning of clinical practice at a child care support center

寺井 孝弘¹⁾, 宮内 環²⁾

Takahiro Terai¹⁾, Tamaki Miyauchi²⁾

¹⁾金沢医科大学看護学部

²⁾関西国際大学保健医療学部看護学科

¹⁾School of Nursing, Kanazawa Medical University

²⁾Kansai University of International Studies Faculty of Health Sciences

キーワード

子育て支援センター, 小児看護学演習, 看護学生, 親子, 学習体験

Key words

child care support center, pediatric nursing practice, nursing student, parent and child, learning experience

要 旨

背景：少子化の影響で、子どもと関わる機会が少ない学生がいる。その現状を踏まえ、親子の関わり方を観察し、関わる事が可能な子育て支援センターでの演習を実施した。そこで、本研究では子育て支援センターでの演習の効果を検討するために、学生の学びを明らかにすることを目的とした。

方法：対象は子育て支援センターで演習をした看護学部3年生のうち研究参加に同意を得られた63名の演習記録をデータとした。データは、演習の学びに関連した意味ある文脈ごとに区切り、コード化し、抽象化を経てカテゴリーに分類した。

結果：子育て支援センターの演習における学生の学びは【子どもの成長発達の理解】、【遊びの理解】、【親子への関わり方】、【親子関係の理解】、【環境整備の必要性】という5つのカテゴリーに分類された。

Abstract

Objectives : Japan is facing a severely decreasing birthrate. Therefore, nursing students have little practical experience with children. This study aims to clarify the learning of nursing students in clinical practice at a child care support center.

Methods : The subjects were 63 third-year nursing students who participated in clinical practice for one day at a child care support center. Data is separated for each context a sense related to the learning ex-

ercise, coded and categorized through abstraction.

Results : The students' learning was classified into the following five items: "Understanding of the child's growth and development"; "Understanding of play"; "Methods of interacting with parent and child"; "Understanding of parent-child relationship"; and "The necessity for environmental maintenance".

はじめに

小児看護で援助の対象となる今日の子育て世代の多くは、少子化のために子どもとの接触体験が少なく、核家族が多いため、子育てに戸惑いを感じる人が多い。さらに、学生も子育て世代と同様、少子化・核家族の中で育っているため、子どもとの接触体験や生活体験が少ない¹⁾²⁾。このような背景を受けて、小児看護学教育に関する先行研究では、小児看護学実習における子どもへの関心や理解に関連したもの³⁻⁶⁾、子どもと家族に関する学習を深めるための講義や演習方法に関する研究について幾つか報告されている。具体的には、学生が様々なフィールドで子どもの日常生活場面を観察し、子どもと子どもを取り巻く人々との関わりを観察記録したもの⁷⁾、子どもと家族を継続的に観察(2~6回の訪問)したもの⁸⁾、家庭訪問(20~23回)を行い、家事や育児の援助を実施したもの⁹⁾。これらの報告では、学生が子どもの言動から認知や性格、発達段階を理解し、親子のやりとり、きょうだいや子ども同士の関わりから社会性の発達に関する理解を深めることが示されている⁷⁾。また、学生自身で家族から直接話を聴くことができた場合は、母親の身体的負担や悩み、育児環境やサポートの重要性に関する現実的な内容まで考察が深まったと報告されている⁸⁾。

つまり、前述のように子どもとの接触体験が少ない学生にとって、健康な子どもと家族に関わる経験を積むことには大きな意義があるが、子どもや家族に関する理解や援助技術の習得を座学では

かるのは困難である。実際、3年後期に実施する小児看護学実習では看護の対象が子どもと家族であることに戸惑い、アプローチに苦慮する学生もいる。

そこで、まずは入院をしていない健康な子どもと家族の具体的なイメージを構築してもらい、実際の親子を観察し関わることで子どもと家族双方へのアプローチの重要性を意識してもらう必要があると考えた。そのため、健康な親子の日常生活の一場面に触れることができる子育て支援センターでの学外演習を計画した。

本研究の目的は、演習における学生の学びを明らかにし、子育て支援センターでの演習を取り入れた効果について検討することである。

演習の位置づけと概要

1. 授業科目の構成(表1)

本学では、2年次に「小児看護学概論」1単位30時間、「小児看護学方法論Ⅰ」1単位30時間の講義を展開し、3年前期に「小児看護学方法論Ⅱ(演習)」1単位30時間、3年後期に「小児看護学実習」2単位90時間を行っている。このうち講義・演習では、子どもとその家族を理解するために、各段階の身体・心理・社会面の成長発達と健康障害をもつ子どもの特徴的な疾患と健康レベルにおける看護について教授している。そして実習では、療養生活を送る子どもを総合的に理解し、その個人と家族に必要な看護を判断して実践する能力が習得できることを目標としている。

表1 小児看護学の授業科目構成

学 年	科 目 名	主 な 目 的	時 間 (単位)
2 学年	小児看護学概論	子どもの成長発達と家族の理解	30 (1)
	小児看護学方法論Ⅰ	健康障害をもつ子どもの特徴的な疾患と健康レベルにおける看護の理解	30 (1)
3 学年	前期 小児看護学方法論Ⅱ (演習)	成長発達の特徴をふまえた、小児に特有な看護技術の習得	30 (1)
	後期 小児看護学実習	療養生活を送る子どもを総合的に理解し、その個人と家族に必要な看護を判断して実践する能力の習得	90 (2)

表2 演習タイムスケジュール

時 間	内 容
30分間 (9:00～9:30)	学内集合、集団遊びの内容確認、施設への移動
60分間 (9:30～10:30)	親子との関わり (親と子や来所者同士、職員との関わりを参加観察したり、子どもの遊びに参加したり、親に話を聞いたりする)
15分間 (10:30～10:45)	集団遊びの実施 (親子全員を対象に計画してきた遊びを提供する。音楽遊び、感覚遊び、ものまねクイズなど)
30分間 (10:45～11:15)	親子との関わり (上記と同様)
30分間 (11:15～11:45)	カンファレンス (事前に設定した集団遊びの評価項目に沿って評価)
25分間 (11:45～12:10)	片付け、学内への移動

2. 小児看護学方法論Ⅱ（演習）の概要

学習目標は、成長発達の特徴をふまえた、小児に特有な看護技術（食事、排泄、清潔、遊びの援助、看護過程の展開法）を習得することであり、教授方法は、講義、学内・学外演習である。今回実施する子育て支援センターでの演習は上述の学外演習に相当し、親子が過ごす日常場面に関わる中で、健康な子どもの成長発達、親子関係について学ぶことを目的とした。演習場所である子育て支援センターは地域で子育てを支える支援拠点の1つとして機能しており、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場である。

3. 学外演習の実施内容

平成25年度4月から小児看護学方法論Ⅱ（演習）受講予定の学生に対し、事前に学外演習のオリエンテーションを実施し、小児看護学概論で学んだ子どもの成長発達・遊び・小児保健に関する事前学習と、親子でできる集団遊びの企画を学生1名ずつに課した。

次に、学生を10～11名にグルーピングし、1グループずつが各週土曜日の2コマを使って子育て支援センターで演習できるように設定した。また、グループ毎に1つの集団遊びの計画書（内容、手順、留意事項、評価項目等）を作成してもらい、子育て支援センター職員の内容確認を得て、当日までに練習し準備することを課した。当日は、子育て支援センターで来所する親子を対象とした集団遊びの実施をグループで行い、演習後に演習記録の提出を課した。タイムスケジュールを表2に示す。

方 法

1. 研究対象

小児看護学概論、小児看護学方法論Ⅰを修了し、小児看護学方法論Ⅱを受講した者の中で、2013年4月から2013年5月までにA町子育て支援センター1か所で演習をした看護学部3年生65名とした。そのうち研究に関する倫理的配慮や研究目的について説明し研究参加が任意であることを伝え、同意を得られた63名の学生の演習記録をデータとした。

2. データ収集および分析方法

データは演習後に学生が記述した演習記録の内容全てとした。演習記録はA4用紙2枚に演習で学んだことについて自由記載することとし、字数制限等は特に設けなかった。ただし、子どもの成長発達、コミュニケーションについて等、記載する視点の例示は行った。

分析は、データ全体を2回読み返した後、学生が演習を通して学んだと考えられた内容を意味ある文脈ごとに区切り、コード化し、抽象化の作業を経てカテゴリーに分類した。その際、疑問が生じたコードやカテゴリーについては演習記録に戻り、研究者2名で検討し、信頼性と妥当性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

本研究は金沢医科大学の倫理審査委員会の承認（NO.155）を得て実施した。

研究対象者へは研究目的、研究の自由参加、研究不参加によって成績上の不利益がないこと、データは個人が特定されない形にして扱うことを口頭にて説明した。また、演習記録を研究データと

表3 学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード (例)
子どもの成長発達 の理解	子どもの身体的特徴	3	運動機能の発達 子どもは自己で危険回避できない
	子どもの精神発達への影響	7	想像力が豊かになる 精神力や感性を養う
	社会性の獲得	2	遊びを通し、多くの経験をする 同・異年齢の子どもとの遊び
遊びの理解	心身の発達からみた遊び	8	歌や音楽は様々な年齢で一緒に遊べる、良い刺激物にみためて遊ぶ
	社会関係からみた遊び	6	自分の興味に集中して遊ぶ 同じ遊びをしているが一人ひとり別の行動
	遊びの機能	12	子どもが自分の気持ちを表現する手段となる 遊びの中で子どもの発達を確認出来る
	認知発達段階に沿った遊び	7	個々に合わせることの困難さを感じた 五感に働きかけるおもちゃを知っておく大切さ
	遊びへの介入の方法	7	子どもの意志を尊重する 子どもの好きな遊びを見つけ、積極的にコミュニケーションをとる
親子への関わり方	子どもの年齢や発達段階に応じた関わり	25	短く具体的な言葉を選んで話す (歌、絵や本など) 感覚に訴えかけるコミュニケーションが重要
	子どもの個別性に合わせた関わり	9	子どもの表情や動作から子どもの感情を読み取る必要性 子どものペースに合わせる
	信頼関係を築く方法の考察	15	親との関わりを持つことにより子どもの信頼を獲得する 遠くから立て膝を付き目線を合わせて近づく
	子どもの発達を促す関わり	6	物の名前だけでなく意味などの付属した内容も伝える オープンクエスチョンにする
親子関係の理解	育児方針	3	やってはいけないことの原因を説明する 子どもは失敗から学ぶ
	親の安全基地としての役割	11	親の反応で子どもの心が満たされる 子どものサインを母親がきちんと解釈して対応する
	愛着行動の実際を体験	12	人見知りをする 後追いをする
	子どもの特徴を捉えた関わり	5	興味のあること 親の子どもへの接し方に個別性があることの理解
	親子の相互作用	20	啼泣や微笑によって養育行動が引き出される 言い方や接し方で子どもの反応が変わる
	親の負担軽減への援助の考察	5	きょうだいの面倒を見る必要性 周りの大人の協力により、良い親子関係を築ける
環境整備の必要性	子育て支援センターの特徴	15	同世代の子どもを持つ親同士が関わる事が出来る 同世代の子どもと遊ぶことで刺激になる、集団遊びを学ぶ
	環境整備をしていく上で必要な子どもの特徴	8	危険予知能力が発達していない 児の行動を推測する
	安全面の配慮	5	母やスタッフが見守る 発達段階に合わせて遊べる環境
	安全な環境整備の方法の考察	7	床に物を置かない 口に入る大きさの物は置かない
	子どもの成長発達を促す効果	19	親以外の他者と関わる事が出来る 社会性が身に付く、スムーズに遊べる

することの拒否に関しては、研究を担当していない他教員に伝える、直接ではなくメール等の電子媒体を使用しても構わないことを説明した。

また、学外演習を実施する子育て支援センター所長へは、得られた個人情報には研究目的以外には使用しないことやプライバシーに配慮することを説明し、口頭による承諾を得た。

結 果

1. 学生が関わった親子の概要

子どもの年齢や参加した親子は参加日によって異なっていた。子どもの年齢は0～12歳で、10～25組の親子の参加であった。

2. 学生の学びについて

分析の結果、【子どもの成長発達の理解】、【遊びの理解】、【親子への関わり方】、【親子関係の理解】、【環境整備の必要性】の5つのカテゴリが見出された。それらは23のサブカテゴリで構成されていた。

カテゴリは【 】, サブカテゴリは『 』、コードは「 」で記載した(表3)。

1) 子どもの成長発達の理解

このカテゴリは『子どもの身体的特徴』、『子どもの精神発達への影響』、『社会性の獲得』の3つのサブカテゴリから構成されていた。学生は、複数の発達段階や年齢の子どもを観察し、関わることで経年的に「運動機能の発達」をしていることや「子どもは自己で危険回避できない」という未熟性があることを実際のイメージを伴って学習していた。また、子どもと家族の生活の一場面ではあるが、子どもの「同・異年齢の子どもとの遊び」の様子をみて「多くの経験をする」ということ、遊びを通して「想像力が豊かになる」や「精神力や感性を養う」ということにつながっているという【子どもの成長発達の理解】をしていた。

2) 遊びの理解

このカテゴリは『心身の発達からみた遊び』、『社会関係からみた遊び』、『遊びの機能』、『認知発達段階に沿った遊び』、『遊びへの介入の方法』の5つのサブカテゴリで構成されていた。

学生は、講義で学習していた感覚遊び、模倣遊び、受容遊び、構成遊びという『心身の発達からみた遊び』、ひとり遊び、傍観遊び、並行遊び、連合遊びという『社会関係からみた遊び』を実際の「物にみだてて遊ぶ」姿や「同じ遊びをしているが一人ひとり別の行動」をしている様子から実際の体験として学習していた。また、遊びによっ

て「子どもが自分の気持ちを表現する手段となる」や「遊びの中で子どもの発達を確認出来る」など

『遊びの機能』について理解していた。そして、実際に自分が子どもへ遊びを提供しようとした際に「個々に合わせることの困難さを感じた」や「五感に働きかけるおもちゃを知っておく大切さ」などに気づき、試行錯誤する中から「子どもの意志を尊重する」や「子どもの好きな遊びを見つけ、積極的にコミュニケーションをとる」という『遊びへの介入の方法』を学んでいた。

3) 親子への関わり方

このカテゴリは『子どもの年齢や発達段階に応じた関わり』、『子どもの個別性に合わせた関わり』、『信頼関係を築く方法の考察』、『子どもの発達を促す関わり』の4つのサブカテゴリで構成されていた。学生は、より具体的に「短く具体的な言葉を選んで話す」など『子どもの年齢や発達段階に応じた関わり』や「子どもの表情や動作から子どもの感情を読み取る必要性」を感じ、観察しながら『子どもの個別性に合わせた関わり』を実施し、「親との関わりを持つことにより子どもの信頼を獲得する」という親と子どもにバランスよく関わる方法や子どもに不安を与えないよう「遠くから立て膝を付き目線を合わせて近づく」という方法など『信頼関係を築く方法の考察』をしたり、「物の名前だけでなく意味などの付随した内容も伝える」など『子どもの発達を促す関わり』について考察していた。

4) 親子関係の理解

このカテゴリは『育児方針』、『親の安全基地としての役割』、『愛着行動の実際を体験』、『子どもの特徴を捉えた関わり』、『親子の相互作用』、『親の負担軽減への援助の考察』の6つのサブカテゴリで構成されていた。学生は、親子と関わる中で「子どもは失敗から学ぶ」「やっちはいけないことの原因を説明する」という親の『育児方針』に沿って関わる姿をみたり、子どもの「興味のあること」を促したりするなど『子どもの特徴を捉えた関わり』をしていることを観察できていた。また、子どもの「人見知りをする」とか「後追いをする」という『愛着行動の実際を体験』し、その行動に対して「親の反応で子どもの心が満たされる」とか「言い方や接し方で子どもの反応が変わる」様子から『親の安全基地としての役割』や『親子の相互作用』について学んでいた。一部の学生は、親が「きょうだいの面倒を見る必要性」があること「周りの大人の協力により、良い親子

関係を築ける」という『親の負担軽減への援助の考察』までされていた。

5) 環境整備の必要性

このカテゴリーは『子育て支援センターの特徴』、『環境整備をしていく上で必要な子どもの特徴』、『安全面の配慮』、『安全な環境整備の方法の考察』、『子どもの成長発達を促す効果』の5つのサブカテゴリーで構成されていた。学生は今回の演習施設である『子育て支援センターの特徴』として「同世代の子どもを持つ親同士が関わることが出来る」、「同世代の子どもと遊ぶことで刺激になる、集団遊びを学ぶ」場として捉えていた。また、子どもに「危険予知能力が発達していない」ことを踏まえて「母親やスタッフが見守る」、「発達段階に合わせ遊べる環境」など『安全面の配慮』が必要であり、具体的には「床に物を置かない」、「口に入る大きさの物は置かない」など『安全な環境整備の方法の考察』が必要であると学んでいた。これらの環境整備を行うことによって、「社会性が身に付く、スムーズに遊べる」という『子どもの成長発達を促す効果』があると考察していた。

考 察

保育園やその他の施設とは違い、親子の生活の一場面に触れられる子育て支援センターで演習を実施した効果を以下の視点より考察する。

1) 子どもの成長発達の理解

学生は、子育て支援センターに来所していた様々な年代の子どもを見て、関わることで各年代での子どもの身体的特徴、精神発達への影響、社会性の獲得を比較しながら、座学で学んだ知識の再確認をしていた。保育園実習の学生の変化における研究⁵⁾でも可能な限りさまざまな年代を見ることにより、比較検討ができる環境は各年代の理解につなげられ、今後の実習効果に影響がみられると述べている。糸井らの研究³⁾では4日間の保育園実習で、学生の学習体験として成長・発達に関するカテゴリーでは、成長・発達の早さを実感する／各年齢の成長・発達を知り興味をもつ／同年齢での成長・発達の個人差を知るというサブカテゴリーから学習していると報告しており、今回の演習で得られたサブカテゴリーと類似していることから、半日程度の短時間の関わりであっても幅広い年代の子どもが1つの施設で過ごす場面に参加することで、学生は子どもの成長・発達への理解が促進されると考える。子育て支援センターでは、1施設に乳児から学童という様々な年代の

子どもが来所するため、年代による違いがより比較しやすく、子どもが発達していく存在であることを具体的なイメージとして理解していたと考えられる。

2) 遊びの理解

学生は座学で学んだ、『心身の発達からみた遊び』である感覚遊び、模倣遊び、受容遊び、構成遊び、『社会関係からみた遊び』であるひとり遊び、傍観遊び、並行遊び、連合遊びという発達段階別に変化していく遊びの知識を実際の子どもが遊ぶ場面に参加し、体験と結びつけて理解されていたと考える。また、集団遊びを企画・実施したことや初対面の親子と関係性を構築しなくてはならない緊張状況におかれたことで、より遊びへの理解が深まったと考える。例えば、初対面の親子と関係性を構築していくには、子どもがしていることや遊びを観察し、その遊びを基に子どもと関わっていくことが大切である。実際に子どもたちを遊びに誘った時の反応で「個々に合わせることの困難さを感じた」学生や音の鳴るおもちゃで子どもの興味を得られた学生は「五感に働きかけるおもちゃを知っておく大切さ」に気づき、発達段階に合わせた遊びやその子どもに合った関わり方を考察する機会になったと考える。たとえ、その場の関わりがうまくいかなかったとしても、子どもにとって遊びが大切であることや自分が子どもと関係性を構築していくツールとして遊びが有用であることは、体験として理解し、今後の学習の動機付けにつながったと考える。

3) 親子への関わり方

親子が来所する場で演習を行い、学生自身が親子へ関わっていく機会を設けてあり、学生は試行錯誤しながら親子への関わり方を学ぶ機会となっていた。保育園実習では、保育士を具体的な関わり方のモデルとして子どもと関わっていくことで次第に子どもへ対応できるようになっていくという経過をたどる³⁾¹⁰⁾が、今回の演習で学生は子どもの特性を熟知している親を関わり方のモデルとしたため、子どもへの関わり方の具体的方策が見いだしやすかったと考える。実際、『子どもの年齢や発達段階に応じた関わり』、『子どもの個別性に合わせた関わり』、『信頼関係を築く方法の考察』、『子どもの発達を促す関わり』について困難さを感じながら、実際の関わりを通して学ぶ機会となっていた。

4) 親子関係の理解

親子の関わりを観察する中で、学生は理解でき

ないが家族は理解していた幼児の発声があったり、子どもの排便時の動きや香りに敏感に反応したりしている家族の様子をみることで、「子どもの表情や動作から子どもの感情を読み取る必要性」を感じていた。逆に、子どもは「人見知り」や「後追い」という愛着行動を示し、見知らぬ学生には警戒心を抱き距離をとり、家族の元に戻ったり学生に少し近づいたりを繰り返す様子や遊びに集中していてもふっと親の姿を探す子どもを観察することで、親が安全基地となっていることや親子の相互作用について、考察することができたと考える。

5) 環境整備の必要性

子育てにおいては様々な環境を整えることで、子どもの成長発達を促すことができる。母親から“きょうだい一緒に遊ばせられる場所が少ない”、“天気が悪い時に子どもと行く場所が少ない”という発言があり、母子が閉塞されやすい環境で子育てをしている現代子育ての現状があることについて考え、子育て支援センターが「同世代の子どもを持つ親同士が関わることが出来る」、「同世代の子どもと遊ぶことで刺激になる、集団遊びを学ぶ」場として必要であると考察されていた。

また、『安全面の配慮』に関しては、子どもの認知や視野などの特徴から「危険予知能力が発達していない」と学び、見守る大人や周囲の環境を整えることで子どもの安全を守っていく必要があると考察していた。具体的に「床に物を置かない」、「口に入る大きさの物は置かない」ことが必要であるという点にまで考察が及ぶ者もいたため、子どもの危なげな様子と危険予防をしている大人を同時に観察できたことが、印象に残りやすかったのだと考える。

研究の限界と今後の課題

子育て支援センターの演習では、参加日により親子の人数や子どもの年齢が異なっており、学生によって学びの内容にも差異が生じ、結果に影響を与えた可能性がある。

しかし、様々な親子の日常の一場面に参加することで得られた学びは、座学で獲得した知識を確認する機会となり、子どもの生活をイメージする一助となっていた。今後は、子育て支援センターでの学びを基にして、病院実習で実施する家族看護や退院後の生活を意識した看護をどのように提供していくかまで考察できるよう講義、演習、実習の内容を検討していく必要がある。

結 論

子育て支援センターの演習における学生の学びは、【子どもの成長発達の理解】、【遊びの理解】、【親子への関わり方】、【親子関係の理解】、【環境整備の必要性】という5つのカテゴリーに分類された。また、子育て支援センターでの演習は、より日常の親子に関わることで子どもの成長発達、親子の関係を理解の促進が期待でき、健康な親子の理解をする上で効果的であった。

謝 辞

本研究にご協力くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は第3回世界看護科学学会学術集会にて発表したものである。

文 献

- 1) 大橋久美子, 菱沼典子, 佐居由美, 他: 看護大学入学生の生活体験, 聖路加看護学会誌, 12 (2), 25-32, 2008
- 2) 石原あや, 藤井真理子, 鎌田佳奈美, 他: 看護学科学生の子どもの接触体験および認識に関する調査—1983年の調査と比較して—, 大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要, 8, 65-72, 2002
- 3) 糸井志津乃, 松田葉子: 保育園における小児看護学実習での学生の学習体験, 目白大学健康科学研究, 3, 81-7, 2010
- 4) 上山和子: 看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について, 新見公立短期大学紀要, 20, 125-133, 1999
- 5) 遠藤芳子, 後藤順子: 小児看護学(幼稚園)実習の有効性の検討—実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から—, 山形保健医療研究, 7, 33-40, 2004
- 6) 高橋衣: 小児看護実践の中に「遊び」を取り入れる必要性を理解するための授業の工夫とその検討—小児病棟実習での「遊び」を取り入れた援助との比較から—, 足利短期大学研究紀要, 26, 103-111, 2006
- 7) 茂本咲子, 泊祐子, 石井康子, 他: 子どもと子どもを取り巻く社会の観察における学生の学習成果, 岐阜県立看護大学紀要, 5 (1), 59-64, 2005
- 8) 谷口恵美子, 長谷川桂子, 石井康子, 他: 子どもと養育者の継続的観察による学生の学習効果, 岐阜県立看護大学紀要, 8 (1), 19-24, 2007

9) 大林陽子, 高橋弘子, 恵美須文枝, 他: 育児支援訪問ボランティアにおける看護学生の体験や学びに関する検討, 愛知県立看護大学紀要, 14, 37-43, 2008

10) 網野裕子, 高橋紀美子: 保育園実習4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもとの関わり方の変化, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 15(1), 93-100, 2008